2022年9月4日　使徒言行録13章44～52節
説教『教会の働き』

高橋克樹牧師

人生には生き方を根本的に決定づける出会いがあります。出会いによって自分が変えられ、生きる方向性が定められていきます。ただ、この世界で自分が主体となっている限り、他者や世界は自分が働きかける対象であって、自分が自分の人生を選択していると考えているかぎり、私たちは自分が変えられることを経験することはほとんどありません。自分の力では変えられない壁のような他者との出会いによって、それまでの古い自分が変えられていくのであって、自分が無力であると思い知らされる存在との出会いがあって初めて、閉じられがちな自分が他者や世界に対して開かれていくのです。特に神の子イエス・キリストとの出会いは私たちを日々変えさせていく存在ですが、実は、神の子イエス・キリストの父なる神もまた自らを変えながら私たちに関わってくださっているのです。私たちは神を永遠不滅の変わらない存在であると考えがちですが、イエス・キリストの父なる神は私たち一人ひとりを生かすためにご自分の関わり方を変えてくださっているのです。なぜなら、そこには人を生かそうとする神の愛があるからです。

たとえば、私たちが試練に出遭っていると、自分が孤独で独りの存在であるかのように感じてしまいます。そのことが示していることは、普段の自分がいかにいろいろなものに頼っているかということです。しかし、必要な方はお一人です。本日の聖書に登場するパウロとバルナバはユダヤ人の安息日に会堂で話をしてくれるようにユダヤ人から頼まれて、ほとんどのユダヤ人が主の言葉を聞こうとして集まってきました。ところが、一部のユダヤ人が多くの群衆の姿を見てひどく妬み、口汚くののしって、パウロが話すことに反対をしたのです。それでも、パウロとバルナバは勇敢に語り始めます。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている」と語ったのですが、それがきっかけになって、「わたしたちは異邦人の方に行く」と語って、異邦人伝道に大きく舵を切った出来事として使徒言行録に記されることとなったのです。そこで48節以下によると、異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美したのでした。

パウロもバルナバもユダヤ人に主イエス・キリストの福音を宣べ伝えようとしていたのです。けれども、ユダヤ人の反対に遭ってしまったのです。このユダヤ人の反撃に出会ったことで、その頃ユダヤ人の会堂に集まっていた異邦人が喜んで主の言葉を受け入れるようになって、主イエス・キリストの福音はユダヤ人という枠組みを超えて普遍宗教になって行ったのです。おそらく、パウロとバルナバが語った主の言葉を妬んだのはファリサイ派や律法学者たちだったのでしょう。彼らはいわば信仰の専門家です。しかし、信仰を持っていると自負する人間においてほど、実は信仰は硬直化しやすいのです。生前のイエスはそのような硬直化したユダヤ社会から脱出して、異邦人世界へと赴いたことが福音書には出てきます。そして、そこで主イエスは異邦人にも福音が受け入れられることに出遭うのです。たとえば、カナンの女の信仰がそうです。しかし、主イエスは自分の言葉が受け入れられる場所を求めて異邦社会に出て行ったのではありません。イスラエルの伝統の埒外にある場所にまさか信仰があるとは夢にも思っていなかったようです。そういう希望を抱いていたのではなく、自ら信仰なき異邦人社会に出向くことで、自ら信仰の試練に身をさらしたのではないか。試練に身をさらすことで、あえて信仰の鍛錬を積み、主イエスは神の導きにより御自分を委ねようとしたのではないか。そこには神の側でその結果としてカナンの女性との出遭いがあったのです。そのような出会いがパウ

ロとバルナバにも起こったのです。そして、そのような摂理に気づく旧約聖書の言葉が４７節後半の「わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てにまでも救いをもたらすために」（４７節）という言葉が啓示されたのです。このパウロとバルナバの気づきがどうして起こったのか？　それは神が彼らの働きをどのように導くかという深い配慮があって起こった事なのです。この深い配慮は神が自らの姿勢を変えられたからです。イスラエルとの歴史的な関係に固執することなく、ご自分と歴史的に関わりのない人々とも愛に基づいた関係を築こうとされたから、異邦人伝道が起こったのです。

かつて、シモーヌ・ヴェイユは「苦悩は沈黙している」と語りましたが、それと同じように当時の異邦人にとってイスラエルの神は沈黙している存在であったのです。しかし、パウロとバルナバが主の言葉を語ったことで、異邦人もユダヤ人と同じく永遠の命を得ることができることを知って、苦悩から解放されたのです。こうして教会の働きはユダヤ人に対する宣教から一歩進み出て、異邦人全体へと広がって行ったのです。このことは、イスラエルの神がイエス・キリストを通して自らが関わる信仰者の枠組みを根本的に変えられたことを示しています。

マタイ福音書１５章２１節以下のカナンの女の物語では、悪霊に苦しめられている娘を助けて下さいとイエスに取りすがるわけですけれども、イエスは『わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない』（２４節）と拒絶するのです。これは主イエスの癒しの業はイスラエルの伝統的な信仰者に対してしか与えられないという宣言であったのです。この女性に対するなんと絶望的な拒絶の言葉であったことか。主イエスの氷のような冷たい言葉に背筋が寒くなります。イスラエルに対する神の救済の約束が主イエスの意識と思考をいまだに束縛しているかのような言葉です。けれども、この女性は『主よ、どうかお助けください』と、少ない言葉でさらに追いすがります。そこに主イエスはさらに言葉を加える。『子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない』（２６節）と、イスラエルにしか約束されていない救済が異邦人（小犬）に与えられるはずがないと、ここでさらに拒絶を行うのです。

ところが、このカナンの女性は主イエスの拒絶の言葉の一枚上を行くのです。彼女は主イエスの言葉を逆に用いて上手に軌道修正して、『主よ、ごもっともです。しかし、小犬（＝異邦人）も主人（＝神）の食卓から落ちるパン屑（＝救い）はいただくのです』（２７節）と、神の救いに「存在の区別がない」ことを明らかにするのです。ここで、主イエスに根本的な変化が起こります。主イエスの存在もまたこの世の存在であるがゆえに、イスラエルの伝統に重くからめとられていました。その束縛が、異邦の女性の、イスラエルの信仰によらない女性の、娘が癒されることだけを必死に求める女性によって解き放たれたのです。信仰を持っているかどうかという基準は、ここでは何の意味も持たないのです。つまり、信仰はその人個人の内面に形成されるものではなく、神のご意志がその人間存在の身の上に起こること以外では成り立たないのです。いま、異邦のカナンの女性の上に神のみ業が為されて、神の救いが実現するのです。神の子イエスもまた、一人の女性との出遭いによって自らが解放され、神の御業を為す器としての自分に気づいたのです。これとおなじように、パウロとバルナバはユダヤ人の拒絶に会うことによって、教会の働きが異邦人に向けられていくことに気づかされたのです。このように教会の働きは境界線を越えてなされていくものです。教会の歴史も人間的な視点で見れば、偉大な働き人によって為されたかのように記録されがちですが、その時代に生きた信仰者を神がどのように用いて福音を宣べつたえたかという視点が重要なのです。この神の働きをみなければ、教会の働きも見誤ることになってしまうでしょう。